

## 「ビルマ語の -ha\_ と日本語の 「は」 」 つじての覚え書き

加藤 昌彦

たゞ同じような感覚で接することができる、日本人にとっては極めて「楽な」言語である。  
 ビルマ語の助詞の中には日本語の助詞と職能が極めてよく似たものがある。本稿ではそのうちのひとつである -ha\_を取り上げる。この助詞の用法は日本語の「は」と相当程度似ており、例えば大野「一九八三・一六六」は、-ha\_が「日本語のへへは丶に相当す」こと説明する。次の文を見ていただきたい。

### 一 ビルマ語の助詞 -ha\_

ビルマ語はチベット・ビルマ語族に属する言語で、ミャンマー連邦の公用語である。よく東アジアや東南アジアの言語は日本人にとって学びやすいと言われるが、その中でもビルマ語は特に日本人にとって習得しやすい言語だと思う。同じ東南アジア大陸部の言語でも、タイ語、ベトナム語、カンボジア語などの言語は日本語と語順が異なるため、話したり聞いたりするときに頭の中でいわば「ひっくり返す」作業をしなければならない。ところがビルマ語は基本的語順がSOVで日本語と同じであることともさることながら、日本語の助詞と似たような付属語が豊富に揃っている。したがって、日本語とまつ

(1) canO\_-ha\_-maun\_mya'thun: ^pa\_-

私 HA ハ-ハ・〃ヤシトゥン〔丁寧〕

「私はマハ・〃ヤシトゥンです」

見てのとおり、-ha\_はそのまま日本語の「は」で訳すことができる。日本人学習者にとって驚きなのは、この助詞が「は」と職能の点で似ているばかりか形までもが似ていることである。もちろんこれは偶然なのだが。

では、-ha\_と「は」の類似性は言語学的にどう説明されるのか。この(1)が似ているとすれば、おそらく、双方ともが「主題(話題・題目)」の標示に関わっていると

いう点においてだと言つてよいと思つ。

日本語については、「は」と「主題」の関連を多くの研究者が述べていることは言をまたない。一例を挙げれば、益岡・田窪「一九八九・一三〇」は、「は」は、主題を提示する助詞の中で最も重要ななものである」とする。

### 二 助詞 -ka.

本論に入る前に、ビルマ語のもうひとつの助詞 -ka. を用いる際に日本人が間違えやすいと思われる点を指摘し、ビルマ語を学習する日本人の便に供することである。なお、以下の説明の多くは、-ha\_の振る舞いの特性を論じた拙文「一九九六」で得られた成果に基づく。

いっぽうの -ha\_ を「主題を示す標識」と言い切つてもよいかどうかはともかくとして、これが言語学で一般に言われる「主題」の標示に関わっていることは否めない事実だと思われる。筆者が拙文「一九九六」で指摘した -ha\_ の振る舞いの多くは、主題といふものの性質に根ざした現象であろう。先行研究の森「一九九二」や澤田「一九九五 a」も、-ha\_ と主題の関連を示唆している。

日本人学習者にとって「は」と共通の特徴をもつ -ha\_ の用法を習得する」とは容易だと言えるだろう。反面、日本語の「は」の用法がビルマ語でも通用すると思ひ、み、思われぬ間違いを起こす危険性をもはらんでいる。なぜなら -ha\_ と「は」の用法には類似点だけでなく多くの相違点が存在するからである。そこで、学習者としてはこの助詞の用法と日本語の「は」の用法との異同をきちんと把握しておかなければならぬ。本稿の目的は -ha\_

(1) canO ^ ka. maun\_mya'thun: ^ pa\_-  
私 KA ハ-ハ・〃ヤシトゥン〔丁寧〕  
「私がマウノ・〃ヤシトゥンです」

実はこの助詞の存在も日本人にとっては多かれ少なかれ驚きだらうと思う。ある面で日本語の「が」と用法が似ているばかりでなく、発音までもが似ているからである。

(11) の例文は、「が」を用いて「私がマカノ・ミヤシトウ  
ノヤナ」と日本語に訳すことができる。(11)の文を「は」  
で訳すといふやうだが、それは文脈による。大野「一九

八三：「六七」は、これが「日本語のへ～が／またはへ～  
は／に相当する」と述べている。日本語と形が似てゐる  
のはこれもまた偶然としか言いようがない。

本稿では、論点を「ha\_」一本に絞り、「ka\_」については「ha\_」  
との対比においてのみ触れることにする。比較の対象と  
して「ka\_」を用いるのは、「ka\_」が主語につく標識のうち「ha\_」  
とともに最もよく使われるもので、かつ具体的な音形を持  
つものだからである。「ka\_」についての詳細は YABU [1994]、  
SAWADA [1995]などを参照されたい。

### III 主語以外の名詞句に付くかかないか

日本語の「は」が付くものの範疇は様々である。例えば「悪くはない」では形容詞に付いているし、「日本では」  
においては格助詞の後ろに付いている。一方、ビルマ語の「ha\_」は名詞句の後ろにしか付くことができない。例え  
ば、場所を表す助詞「ha\_」の後ろに「ha\_」を付けた、

(11) \*japan\_-hma\_-ha\_  
日本 や HA

という言い方は存在しない。それでは、「ha\_」は名詞句な  
いじんなものにでも付くことができるのだろうか。  
まず、次の日本語を考えてみよう。

(四) ハの本は漱石が書いた。

この文における「ハの本」は「書いた」という述語に対  
してどのような関係にあるか。それには主題化を伴わな  
い次のような文を考えてみればよい。

(五) 漱石がハの本を書いた。

(五) では「ハの本」が格助詞「を」によって標示されて  
おり、「目的語」であるハと見えてれる（日本語の「目  
的語」）の正確な規定については角田「一九九一・二〇二  
-1111」を参照のこと）。すなわち、(四)では目的語に  
相当する要素が「は」によって主題化されていると見る

ハルができない。

ドは、(四)の日本語文に相当する次のようなビルマ語  
文はハルだねつか。

(K) di\_sa\_ 'ou'ha\_shaya\_-zO\_ji\_ye: ^khe. ^tE-  
ハの本 HA ハージー先生 書く〔過去〕〔現実  
話〕

「ハの本はハージー先生が書いた」

（六）と（七）を比べると（七）のほうが明らかに容認度  
が高いのである。ハルより（七）は文句なしに適格な  
文である。（六）では「ha\_」が「目的語」に付いているのに  
対して、（七）では「主語」に付いてくる（ビルマ語の「主  
語」と「目的語」については SAWADA [1995] を参照の  
ハル）。SAWADA は、ビルマ語に「目的語」を認めるハと  
に否定的である。本稿では便宜的に、助詞「ko\_」で標示さ  
れる可能性のある名詞句を「目的語」と呼んでおく。（六）  
と（七）の容認度の差異は、「ha\_」が「主語」に付いてい  
るかどうかによるものである。実際の用例にあたってみ  
ても、「ha\_」の付いた名詞句は「主語」であることが圧倒  
的に多い。「主語」以外の名詞句に付いた文は多かれ少な  
かれ容認度が低くなる。

といふが、(六)のように、「ha\_」が「主語」以外の要素  
(多くは「目的語」である)に付いた文は、ビルマ人の書  
いた文章の中にしばしば見られる。次の二番目の「ha\_」は  
その一例である。

(七) shaya\_zO\_ji\_-ha\_di\_sa\_ 'ou' ye: ^khe. ^tE-  
ハージー先生 HA ハの本 書く〔過去〕〔現実  
話〕

「ハージー先生はハの本を書いた」

(八) da\_ ^pe\_miE.wu'thu.ha\_lu\_ngE\_ ^twe\_-ye.  
しか 小説 HA 若者 たら の

ko\_jin\_taya: !wE: hma: ^se\_ tE\_ sho\_ ^tE.

ヰハハ

體Q [捷絶] [現実法] ズハ

[連体]

'ayu\_ 'asa\_ -ha\_ tathaun. ko: ya\_ txoun: zE\_

ヰカ

HA | ハ||O

-pye. hni'\_maya: -hma\_ IE'\_makhan\_ ^tO. ^phu:

年代

ノ | もの取れ入れなし

「つか」、小説は若者達のモラルを低下させると  
いう考え方の一九三〇年代には受け入れられな  
くなつた

ルハド、「田的語」に -ha\_ が付いた文がどの程度ビルマ人に受け入れられていいのか、ビルマ人八三人を対象にアンケートを行つて調べてみた。アンケートでは、①と②についての判断を、「適切である」「どちらともいえない」

「適切でない」の中から選んだら、(①は (大) ) に同じ。②は①の -ha\_ を -ka\_ に替えたもの。

- ① di\_-sa\_ 'ou'\_ha\_ shaya\_-zO\_ ji\_-ye: ^khe. ^tE\_  
② di\_-sa\_ 'ou'\_ka. shaya\_-zO\_ ji\_-ye: ^khe. ^tE\_

#### 四 「対照」の意味を表すか

久野「[一九七二]」などで論じられてくるように、日本語の「は」にはいわゆる「対照」を表す用法がある。

(九) やは、「匪」と「匪」が比較対照されてしまふ。また、(一〇) は、単に太郎に関する叙述である場合もあり得る

(一〇) 太郎は会社に行つた。

が、「次郎は行かなかつたが、太郎は行つた」というより、別人と対比する含みを伴つことがある。

一方、ビルマ語の -ha\_ とのよぶな対照を表す用法はない。例えば、

- (一) maun\_mya'thun: -ha\_youn: ^ko\_txwa: ^tE\_  
マウン・マヤントゥン HA マハスニ 行く [現実法]

「マウン・マヤントゥン」は会社に行つた」

は、「マウン・マヤントゥン」という人物に関する叙述と解されるのみであつて、決して他の人と対照する意味には取られない。対照の意味を出すためには、-ha\_ ではなく次の よのと -ka\_ を用ひなければならぬ。

- (二) maun\_mya'thun:-ka(^tO.) youn: ^ko\_txwa: ^tE\_

マウン・マヤントゥン KA TO マハスニ 行く [現実法]

「マウン・マヤントゥン」は会社に行つた」

その結果、-ha\_ を用いた①や六七・五%の人が、-ka\_ を用いた②で五〇・六%の人が「適切である」を選んだ。これに基づきカイ二乗検定を行つたところ、①と②の間で有意差が認められた( $\chi^2 = 4.88$ , df = 1, p < 0.05; 詳細は拙文「一九九六」を参照)。

従つて、田的語に -ha\_ が付いた文は、完全に適切とは言いがたいにして、目的語に -ka\_ が付いた文よりは容認度が高いと言えそうである。しかし、全員が「適切」を選んだわけではないので、ビルマ語を学ぶ外国人としては、このような文を用いないほうが無難ではある。

#### 五 「総主文」

日本語には、三上「[一九六〇]」が用いた、

- (一) 象は鼻が長い。

という例によく知られる、「わゆる総主文がある。総主文では、「XはYが～」というように、名詞句が「は」および「が」を用いて標示されるのが最も一般的である。日本人がビルマ語で「象は鼻が長い」という意味の文

を作文しよへし日本語の標示に取扱いが、

実、次のよつた例があ。

- (15) shin\_-ha\_ hnamau : ^ka. sye\_ ^tE\_  
象 HA 鼻 KA 長<sup>シ</sup> [現実法]

ムンたら、実は困ったんだ。先ほどの匡シトンケーヌド試みに(14)の文の適否を尋ねたふりで、「隣町であれ」を選んだ人は八三人のうち一五人(18・1%)に過半数なかった。この結果は、ビルマ語の「総主文」における-ha\_ル・ka. が一緒に現れることが普通はないふつゝるを反映して、(14)は、次のいづれかに直せば適格な文になる。

- (16) shin\_-ha\_ hnamau : sye\_ ^tE\_  
象 HA 鼻 長<sup>シ</sup> [現実法]  
(17) shin\_-^ka. hnamau : sye\_ ^tE\_  
象 KA 鼻 長<sup>シ</sup> [現実法]

ただ、-ha\_ル・ka. は「総主文」に同時に現れるふつゝるは、あつたく不可能といつうわけではないようである。事

- (18) 'E: di\_-u: baziin::ha\_ 'atxE'ka. chau'shEnga:  
N<sup>シ</sup> 隣町 HA 岸輪 KA 長<sup>シ</sup>  
hni syi. ^pi: wa\_ dO\_ ^ka. ^tO. le:wa\_ ^tka\_  
N<sup>シ</sup> ~J<sup>シ</sup>田舎年数 KA TO 四年 J<sup>シ</sup>か  
ya. ^tke: ^tE\_ 得<sup>シ</sup>まだ [現実法]

「私の坊ちゃんは、年は六田わで、出家してから年数はまだ四年しか経ってなかつた」  
「私の坊ちゃんは、年は六田わで、出家してから年数はまだ四年しか経つてなかつた」  
得<sup>シ</sup>まだ [現実法]

(19) では、「年齢」と「田舎年数」を対比するため、-ha\_ル・ka. を用いたのだ。しかし、このよつた例は「一般的に」であり、「一般的に「総主文」や-ha\_ル・ka. を同時に使つるはあつたふつゝるは知つておいたほうがよろだ。

## 六 田語と田語の順序

ビルマ語の-ha\_は、澤田〔1995a:四六〕が「一般に文頭の要素にヘヘ」ルンヘヌモウニ、文頭の名詞

句に付くのが多い。もちろん文頭ではない要素に付くふつゝるも少なくはないのだが、やつした場合にねじて、-ha\_が付いた名詞句に先立つ要素といつうのは、副詞節や、時間を表す語句、場所を表す語句などに普通は限られる。拙文「一九九六」では、四種類の口語ビルマ語文テキストを対象に、-ha\_ル・ka. で文頭要素に付く頻度に差があるかといつうが調べた。調査の結果、-ha\_は六四・四%が、-ka. は四四・一%が文頭要素に付いて現れ、有意差( $\chi^2 = 17.96$ ,  $d.f. = 1$ ,  $p < 0.01$ )をみて-ha\_のほうが文頭要素に付く頻度が高いことが確かめられた。

このことに関連してヒルマ語学者が特に注意しなければならないのは、「主語」と「目的語」の順序である。主語が-ha\_で標示されてくるとき、目的語が存在するところ語-ha\_十目的語になるのが一般的であり、「目的語十主語-ha\_」には普通ないない。例えば、ビルマ人にとって(18-a)は適格な文であるが、(18-b)は極めてすわりの悪い文であり、ビルマ人に見せれば必ず首をかげるはずである。

- (19) ma. hla. ^ko\_ ma. win: ^ka. yai:tE\_  
マ・ヘラを マ・ウヤン KA 故<sup>シ</sup> [現実法]  
「マ・ヘラをマ・ウヤンが殴つた」
- 「主語-ha\_十目的語」になるのが一般的であり、「目的語十主語-ha\_」には普通ないない。例えば、ビルマ人にとって(18-a)は適格な文であるが、(18-b)は極めてすわりの悪い文であり、ビルマ人に見せれば必ず首をかげるはずである。

語十主語-ha\_」の順で現れた例はたった一例しか見つかなかった。「目的語十主語-ha\_」という語順は文脈上の条件がよほど揃わないと容認されないようである。

日本語について同様のことと考えてみると、

(110)(a) 花子は太郎を殴った。

(b) 太郎を花子は殴った。

wun : txa\_ -mE  
嬉しく [非現実法]  
「ヤ・モンは日本に行けると喜ぶだい」

(a) ma. mun\_ ^ka. japan\_ txwa :nain\_ -yin\_  
ヤ・モン KA 日本 行く だい よ

wun : txa\_ -mE  
嬉しく [非現実法]

「ヤ・モンが日本に行けると喜ぶだい」

(110)(a) は (110)(a) に比べると「ぐるん特別なニコア」を伴うかも知れないが、容認できないといらうことはないし、実際にこのような文はよく使われる。これに引かれて「目的語十主語-ha\_」という語順を使わないようにビルマ語学習者は気を付けなければならないだろう。

## 七 従属節と-ha\_

ビルマ語の-ha\_と-ka\_は、従属節の内部に現れる可能性において異なる性質を持つ。次の例を見ていただきたい。

(111)(a) ma. mun\_ -ha\_ japan\_ txwa :nain\_ -yin\_  
ヤ・モン HA 日本 行く だい よ

(111)(a) 太郎は家に帰ると食事の準備をする。  
(b) 太郎が家に帰ると食事の準備をする。

日本語にみられるよく似た現象がある。

## (111) X … [ ] - 従属節標識 … 述語

(111)(a) の文では、「食事の準備をする」のは「太郎」と解釈されるだろう。これに対して (111)(b) では、「食事の準備をする」のは「太郎」であるかも知れないが、より普通の解釈では「太郎」とは別の人、例えば「太郎の母親」などであると考えられる。

拙文「一九九六」では、-ha\_と-ka\_が従属節の中に現れた頻度を調査し、-ha\_と-ka\_の間に有意差が見られたことを報告した ( $\chi^2 = 20.03$ , d.f. = 1,  $p < 0.01$ )。従属節の種類によって違いはあるものの、一般に-ha\_は-ka\_に比べて従属節に現れにくないのである。(日本語の「は」の従属節への現れに関しては、南「一九九三」を参照されたい。)

逆に本文の側から見ると、Xを主語に持ち、従属節標識を述語との間に伴つた、次のような構造の文を考えた場合、Xが-ha\_で標示されれば、これが従属節標識に従われた節の要素ではなく主文の要素であることが、一目瞭然となる。先ほどの(111)(a)と(111)(b)の違いを思って出していただきたい。

(111)(a) ma. mun\_ ^ka. txwa : ^chin\_ ^tE\_ -lo. pyO : ^tE\_  
ヤ・モン KA 行く たい[現実法]と話す [現実法]

れりで、「従属節を飛び越えた」・ha\_ ~・ka. も、引用文の場合と一般の従属節の場合に分けて統計をとつてみると、有意差が認められた( $\chi^2 = 35.86$ , d.f. = 1,  $p < 0.01$ )。従って、主語と述語の間に従属節が存在する場合、その従属節が引用文の場合には主語は・ka. で、一般の従属節の場合には主語は・ha\_ で標示される傾向があると言える。

レルマ語で日本人のビルマ語学習者が留意しなければならないのは、(II四)のような文でなるべく・ka. を使うよりにしたほうがよろしくいいとである。日本語の場合、

(II五) 太郎は行きたいと言つた。

のよう、引用文の前の主語を「は」で標示するのはまことに普通だが、ビルマ語では引用文の前の主語は・ha\_ ではなく・ka. で標示したほうが良いのである。この傾向は、主語名詞句の直後の空欄に・ha\_ ' -ka\_ ' 「ヤロ助詞」のいずれかを入れてもらつたアンケート（拙文「一九九六」参照）で、引用文の前に・ka. を入れる人が圧倒的に多かつたことを見ても証明されることがある。

## 八 述部の「重み」

ビルマ語の・ha\_ の特徴の中で、重要なと思われるが今まやほとんど指摘されてこなかった問題に、述部の「重み」の問題がある。まず、次の例を考えてみよう。

- (II六) ma. hla.ha\_ ma. win: ^ko\_ yai:tE\_  
マ・ヘラ HA マ・ホヤンを 翻る[現実法]  
「マ・ヘラはマ・ワインを殴った」

この文は文句なしに問題のない文である。ところが、レルマ語の・ha\_ を取り除いた次の文は、落ち着きの悪い、容認度の極めて低い文である。

- (II七) ? ma.hla. -ha\_ yai:tE\_  
マ・ヘラ HA 翻る[現実法]  
「マ・ヘラは殴つた」

ビルマ語の・ha\_ を用いた文は、述部が動態動詞（動作や、状態変化などを表す動詞）単独の場合に、容認度が極めて低くなるのである。次の場合もそうである。

(II八) ? ma. hla.ha\_ 'ei'tE\_

マ・ヘラ HA 翻る[現実法]

「マ・ヘラは寝た」

(II九) ? ma. hla.ha\_ ka. ^tE\_

マ・ヘラ HA 跳る[現実法]

「マ・ヘラは踊つた」

状態動詞の場合のよほんな問題が生じない。

(II一〇) ma. hla.ha\_ hla. ^tE\_  
マ・ヘラ HA 美し<sup>シ</sup>[現実法]

「マ・ヘラは美しい」

従つて、(II七)の文「マ・ヘラは殴つた」は、述部が動態動詞である上に、動詞の要求する補語が存在しておらず、二重の意味で「良くな」のである。  
これはまだあくまでも仮説なのであるが、ビルマ語の・ha\_ は述部に、ある程度の「重み」を要求するよつたのだ。「重み」というのは言い換えると情報度の高さである。ビルマ語の動態動詞は、単独では・ha\_ の要求する情報度の高さを満たすことができないよつたのである。状態動詞であつても、(II一)のta'のように主語とは別の補語を要求する動詞の場合には、この条件を満たすことができない。

日本語で、

しかし、たとえ状態動詞であつても、動詞が意味的に要求する補語（「よくおねがひばには「目的語」を想定してあるべき）が存在していないと容認度が非常に低くなる。

(II一) ? ma. hla.ha\_ ta:tE\_  
マ・ヘラ HA ～おじやわ [現実法]

(iii) ? ma. hla.-ha\_ la\_ ^tE-

マ・ハ HA 来る「現実法」

「マ・フ<sup>ラ</sup>は來た」

しやとす。例えば、菊地〔一九九五〕によれば、

(iii) A大学は、教授が昨日講演をした。

は適格性に欠ける。ビルマ人にとって、この文は何か言いたりない気がするのである。(iii)は、例えば次のよう、述語を修飾する副詞的な語句を入れてやれば適格になる。

(iii) ma. hla-ha\_ nya-chau'na\_yi\_-hma\_ la\_ ^tE-

マ・ハ HA 夜 六 時 に 来る[現実法]

「マ・フ<sup>ラ</sup>は夜六時に來た」

(ii) (四) が適格なのは、「夜六時」という語句を入れるゝによって述部の情報度が高くなつたからだと考えられる。実をいうと、右で見たような問題は、ビルマ語ほど極端ではないにしても、日本語にも存在するのである。菊地〔一九九〇〕や菊地〔一九九五〕は、日本語の「は」を用いた構文の成立条件に「情報度」の高さが関わつて

が少なくとも第一印象では不自然に映るのは、述部が「A大学」についての情報として成り立ちにくい内容だからだ、と説明する。程度の差こそあれ、似たような問題がビルマ語と日本語に共通して存在するのは、たいへん興味深い」とである。

## 九 文体の問題

最後に、最後に述べたように触れておかねばならない重要な問題として、文体の問題がある。ビルマ語には口語体と文語体があり、その最も際立つた違いは、異なる形態の付属語を用いることである。-ha\_は口語体に属し、文語体の-exi\_に対応する。ところが、澤田〔一九九五b〕も指摘するように、通常の会話における-ha\_の出現の頻度はあまり高くない。-ha\_が多用されるのは、口語体で書かれた文章や、演説、学校の講義、テレビドラマの台詞などの、比較的かじり切った場面においてであり、日常会話

で-ha\_を多用すると奇異な印象を与える。日常会話で用いられる-ha\_には、物事を強調するなどの特殊なニュアンスが伴うようである。日本語の「は」も、口語では文章語に比べて出現の頻度が下がるようだが、それでもビルマ語の-ha\_よりは多く現れるのであって、日本語の「は」を使う調子で-ha\_を多用すると日常会話のビルマ語としては奇妙なものになつてしまふ。

それでは、「主題」は日常会話ではどのように表されるのか。その最も有力な候補は、「ゼロ助詞」である。日常会話では言語外的な条件、あるいはイントネーションやボーカルなどの超分節的要素の助けを得ることができる(ハ)トムアット、(ハ)セレーヌ-ha\_を用いる必要がなくなるのだ。また、日常会話では、-ka\_あるいはこれに対照を表す助詞-tO\_の付いたka\_ tO\_が、-ha\_の「肩代わり」をして主題を表すことがある可能性も否定できない。

拙文〔一九九六〕で私が分析に用いた資料は、口語体ではあるけれども、あくまでも「書かれたもの」である。その意味でこれらの資料が「生きたビルマ語」を反映していないとも考えられる。しかし、同じ言語である以上、共通の原理がどの文体にも働いているであら。

これらの資料が特定の文体に属するものであったとしている。その文体における現象の記述は無意味ではない。ただ、(ハ)く普通の日常会話で主題がどのように表されるかを考えるには、また別の手法が必要となる。これは今後の課題である。

## 一〇 最後に

(ハ)のように、ビルマ語の-ha\_は日本語の「は」と共通の特徴を持ちながらも、相違点を多く併せ持つていて、日本人のビルマ語学習者はこれらの点を意識して学習しなければならない。

(ハ)いで、本文中述べなかつたが、ビルマ語の-ha\_が既知の(old)のみに付くという説がある(THURGOOD [1978]など)。しかし、WHEATLEY [1982]は、-ha\_が未知の(new)のみに付くことの説を否定している。事実、-ha\_は物語など初めて出てきた登場人物に付くことがよくある。また、THURGOOD [op. cit.]は、「既知の主題の持続(continuation of old topics)」を表すのに-ha\_が用いられるとするが、拙文〔一九九六〕でも述べたとおり、そのとは限らない。筆者は、(ハ)つ

た談話レベルの -ha\_ に関する従来の解釈は、主題性の観点から解き直すことができないかとの期待を持つている。」)のような談話レベルの問題についても、日本語と対照して考えてみる価値はある。(日本語については柴谷「一九八九：一〇四】などを参照)。

日本語の「は」同様、-ha\_ に関する諸問題は言語学者の興味を引くつけるものであり、今後も、通時的な考察を含む様々な観点から研究を進めていく必要があると思う。

#### 引用文献

- 加藤昌彦  
一九九六 「ビルマ語の助詞 -ha\_ の特徴について」『東京大学言語学論集』一五号、一六七-110一頁。  
菊地康人  
一九九〇 「X が Y が Z」に対応する「X は Y が Z」文の成立条件——ねむせ(へ)詰容度の明確化』『文法と意味の問題——国広哲弥教授還暦退官記念論文集』一〇五-一三二頁、東京：くわじね出版。  
一九九五 「「は」構文の概観」益岡隆志・野田治史・沼田南不二男  
一九九三 「現代日本語文法の輪郭」東京：大修館書店。  
大野徹  
一九八三 「現代ビルマ語入門」東京：泰流社。  
澤田英夫  
一九九五 a 「ビルマ語中級文法テキスト」(未公刊)。  
一九九五 b 「現代ビルマ語の2つのスタイル」近藤達夫編『言語文化を学ぶ人のために』東京：世界思想社(近刊)。  
SAWADA, Hideo  
1995 "On the Usages and Functions of Particles -kou /-ka. in Colloquial Burmese." In: *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax* (SES41), ed. by Yoshi Nishi, James A. Matsoff and Yasuhiko NAGANO, pp.153-187. Osaka: National Museum of Ethnology.  
柴谷方良  
一九八九 「言語類型論」『英語学の関連分野』英語学大系第六卷 1-179頁、東京：大修館書店。  
THURGOOD, Graham  
1978 "Thematicization and Aspects of the Verbal Morphology in Burmese: the principles of organization." *Berkeley Linguistic Society* 4, pp.254-267.  
角田太作  
一九九一 「世界の諸言語と日本語」東京：くわじね出版。  
WHEATLEY, K. Julian  
1982 *Burmese: A Grammatical Sketch*. Ph.D. dissertation, University of California Berkley.  
萩 同郎  
一九九二 「ビルマ語」『言語学大辞典』第三卷、五六七-六一〇頁、東京：三省堂。



(第五研究部)